

## 詩編 第23編 「イエスと歩む新しい旅」

2025年6月15日(主の日 ウェルカム礼拝) 川崎 恵

私は鎌倉雪ノ下教会の川崎恵と申します。牧師になって21年になります。小学六年生の息子の母です。小学校で役員などもやっていますが、私が教会の牧師だというと、みなさん驚かれます。牧師って女性もなれるんだ。どんな仕事をしているの?どんな生活をしているの?質問せめにあいます。

教会の牧師の仕事は多岐にわたりますが、一番大切な仕事は日曜日の礼拝に仕えること、今、私がしていることですが、聖書のみことばをみなさんにお伝えすることです。不思議なことですが、私たち牧師をとおして、主イエス・キリストがみなさんにみことばを語られます。今、目にはみえませんが、わたしをとおして、主イエス・キリストがみなさんにお語りくださいます。

今日、神様は私たちに詩篇23編という箇所をお与えくださいました。もう一度お読みします。

**主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い 魂を生き返らせてくださる。**

主とは神様のことです。神様と私たちのことを、羊とその世話をする羊飼いにたとえています。

わたしは羊のようだ。神様がわたしの羊飼い。神様が大切に私たちを養ってくださる。導いてくださる。だから私にはなにも不足するものはない。

聖書には羊と羊飼いのたとえがよく出てくるのですが、日本に住んでいる私たちにとって、羊と羊飼いの生活はあまり身近ではありません。わたしもよくわからないので動画で調べてみました。中東の羊飼いの方の生活をみました。何百頭もの羊を遊牧しておられました。羊の毛でつくった絨毯を木に被せたテントのような家のそばに、柵がつくってあり、そこに羊は入っています。朝になると、入り口をあけて、羊を外に連れ出します。標高1500メートルくらいの乾燥した山の上。岩がごろごろしていて、あまり草木がありません。岩と低木ばかりの高原です。羊は目があまりよくないので、自分で草を探すのは大変なのだそうです。羊飼いは羊たちに声をかけて、草があるところに導いていきます。100匹どころではない、何百頭もいます。羊はほんとうにすなおで、羊飼いの呼ぶ声に素直についていきます。とても暑いところなので、羊がまいってしまわないように、木陰に連れていきます。そこには水飲み場があって、ゆっくり休ませます。そして夜になると柵に入れて、柵のそばのテントで羊の様子を守りながら生活する。本当に一声かけるだけで羊はみんな柵の中に入っていきます。すごいなと思いました。その動画ではわかりませんでした。本当に簡単な柵なので、狼などきたらひとたまりもありません。昔の羊飼いは寝ないで羊を見守っていたといいます。今の羊飼いやも交代で見守っているのかもしれない。

**主は羊飼、わたしには何も欠けることがない。主は青草の原に休ませ 憩いの水のほとりに伴い 魂を生き返らせてくださる。神様がわたしたちの羊飼。**

ここに集まったわたしたちは、それぞれに家庭で、職場で、学校で、一生懸命生きて、そしてこの礼拝堂に集まりました。神様の声をききたいと、神様のもとで休みたいと私たちは集まりました。

そして、神様は今ここにおられ、語りかけてくださいます。

わたしがあなたの羊飼。あなたには何も欠けることがない、わたしがあなたを導く。ここがあなたの魂の生き返る場所。いしい水をごくごく飲むように、おいしい草を食べるように、神様のいのちのみことばを語りかけてくださいます。

今、牧師をしている私ですが、ずっとクリスチャンだったわけではありません。20代の後半に洗礼を受けました。

私の家族には誰もクリスチャンはいません。けれども、教会に行くきっかけがありました。よくわからないままに、中学受験をして入学した学校が、ミッション系の学校でした。中学一年生の間は毎週教会に通いなさいと、学校から近所の教会に紹介を受けました。他のミッション系の子供達、親が教会員で小さい時から通っている人もいて、本当にたくさんの子供達が集まっていました。日曜日に教会に行くことは本当に大好きで、ずっと通いましたが、高校三年生のころ、受験勉強やいろいろな悩みのためにだんだん行かなくなってしまいました。

大学を卒業して、就職をしました。コンピューターで映像をつくる仕事につきました。当時はまだ本当に始まりのころで、会社に飛び込むような形でその仕事につきました。今思えば、当時はどの人もがむしゃらに働いていたように思います。浪人をしたので、バブルがはじけた次の年に就職した学年でした。

映像の仕事について数年たったある時、私が勤めていた会社の経営が思わしくなくなりました。会社がお金を稼ぐために、朝も夜も会社にかんづめになって、映像をたくさんつくらなければいけなくなった。体も心もボロボロになり、このまま続けることはできないなと思いました。

ちょうどそのころ大学の友達が集まってごはんを食べました。みんな大変そうでした。お互いの状況を笑いながら話し、がんばろうねと語り合うことができた。ところがその次の週、そのうちの一人が自殺をしてしまったのです。

がんばろうねといいあったのに、もうがんばれないと友達が死を選んでしまった。

ショックをうけた私は会社をやめました。しばらくやすもう。次のことを考えよう。

そうして、仕事をやめて、しばらく休み、そろそろ次のことを考えようと思った矢先、今度は別のところで仲良くしていた友人が自殺してしまいました。その友達は一生懸命勉強しても、親の期待の大学に入れず、親の期待の仕事につけなかったことに苦しみ続けていた人でした。その苦しみのために体も壊してしまっていました。そして死んでしまった。

自分自身も調子を崩していましたが、死ぬことはできなくなりました。朝から晩までと

にかく泣いていました。食べられなくなり、眠れなくなりました。暗闇の中に入り込んでしまったようでした。けれども、その闇のおこうに小さな・のような光のことをずっと思っていました。神様だ。神様のところに帰ろう。そしてわたしはおそろおそろ子供の時に  
行っていた教会の大人の礼拝にはじめて出たのです。

子供の時はほとんど説教がわからなかったのに、その日の説教は神様がわたしに語りかけているとしか思えませんでした。その日の聖書はこんなみことばだったのです。「その死人を葬ることは死人に任せておくがよい。あなたは出て行って神の国を告げ広めなさい」神様は全部ご存じだ。神様はみておられたのだ。友達が死んでしまったこと、今日までのこと、神様から離れて一人で生きていた私のことをずっと神様が見ておられたことを思いました。

私は神様に祈りました。わたしは友達のことを心配しなかったことをあやまらなければなりません。けれども友達に会うことができません。どうか死んでしまった友達をお守りください。わたしはあなたについていくことしかできません。助けてください。

食べることも寝ることもできなかったけれど。毎週日曜日、教会に行きました。説教をききました。そして帰りました。

私は知りました。神様から離れてしまった私たちを絶望と死から救いだし、神様のところに戻ることができるようになるように神様はイエス様のお姿で来て下さった。そして、もういちど神様と一緒に生きることができるようになるように、十字架にかかって下さった。友人を見殺しにしてしまった私の罪、たくさんの人を傷つけ、神様のことを傷つけた罪、全部イエス様がかわりに背負われて、わたしのかわりに十字架にかかって死んで下さった。私の友達も、私もすでに救われている。罪からも死からも救われている。わたしたちは死で終わるのではない。この先がある。

私は 洗礼を受けました。洗礼を受けて、神の子になりました。

羊飼いのもとにわたしは帰ってきたのです。

それは、新しい歩みでした。教会にはたくさんの羊がいました。大勢の年上の人、青年の人、子供達、こんなにいろいろな年代の人と出会うのは初めてのことでした。職業も、出身地もバラバラ。羊の群れの中に入る。それはとても緊張することでした。

でも、それは私たち人間にとって、あたりまえのことでした。人間は神様につくられました。そして、神様は神様に導かれて、神様の声をきいて、神様に守られて一緒に生きていくように造って下さったのです。自分でいろいろ考えるのではなく、神様のみことばをきき、祈り、なんでも神様にお話しし、安心して神様の後についていく。

詩篇の言葉に戻ります。

**主は御名にふさわしく わたしを正しい道に導かれる**

**死の陰の谷を行くときも わたしは災いを恐れない**

**あなたがわたしと共にいてくださる。**

**あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける。**

洗礼を受けて、神様に導かれて歩む歩みは、苦しみがまったくなくなるわけではありません。むしろ、イエス様の弟子とされたことによって、苦しい道を歩くことになるかもしれません。

しかし、今までとは決定的に違うことがあります。わたしはひとりではない。神様がわたしと共にいてくださいます。神様が導いてくださいます。その後をついていきます。

死の陰の谷をいくときも わたしは災いをおそれない あなたがわたしと共にいてくださる あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける

わたしを苦しめる者がいるときもある。死の陰の谷を歩むような時もある。死を目前にしている時もいつか私たちに訪れることでしょう。自分の罪に苦しみ続けることがある。人の罪に苦しめられることもある。しかし、神様は私たちをお見捨てにならない。

その災いの中、その死の陰の谷、その先へとわたしが導く。

そのような時も 羊飼いである神様が 正しい道に導いてくださいます。救いの道へ導いてくださいます。

**あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける。**

羊飼いは 鞭と杖で羊を導いていきます。こっちだよ、そっちにいつてはいけないと杖をつかって、羊をとめたり、コンコンとおとをだして導いたり。そして鞭をもっている。いつオオカミなど 羊を食べる動物が襲いかかってくるかわかりません。その時には羊飼いは鞭で追い払います。交代で番をして、夜通し羊を見守ります。そんな羊飼いのように、神様が昼も夜も、わたしたちを導いてくださいます。

**5節 わたしを苦しめるものを前にしても あなたはわたしに食卓を整えてくださる。わたしの頭に香油を注ぎ、わたしの杯をあふれさせてくださる。**

わたしが久しぶりに教会に戻ると、同年代の方が声をかけてくださいました。そして青年会に招いてくださいました。はじめて来たわたしをみなで歓迎し、紅茶を淹れてくれた。とても丁寧に淹れてくださった。わたしはこんなにおいしい紅茶を飲んだことがないと思いました。喫茶店のコーヒーとは違う。サービスではないのです。その紅茶を淹れてくださった方は本当にいつもどおり紅茶を淹れてくださったのだと思うのですが、わたしはイエス様にもてなされたのを感じていました。

藤沢北教会でも同じことが起きています。

この教会に集まる羊たちをとおして、羊飼いであるイエス様は みなさんにあたたかく声をかけ、お茶を淹れてくださる。うれしくてたまらないのです。神様のもとに帰ってきたことが。大切な一人が戻ってきたことが。

そして、この礼拝のたびごとに、イエス様は私たちをもてなしてくださっている。

**わたしを苦しめるものを前にしても あなたはわたしに食卓を整えてくださる。わたしの頭に香油を注ぎ、わたしの杯をあふれさせてくださる。**

今日はないけれども ここにパンとぶどう液がならぶことがあります。

それは、イエス様が十字架におかかりになる前に、わたしをおもいおこすためにこうし

なさいと弟子たちに命じられたことです。

パンをさくように、わたしの体が十字架にかけられて死んだこと。そして死からよみがえったこと。そして、救われたあなたがたに 新しい体があたえられて 神の国に入る約束があたえられていることを思い起こしなさい。

そしてさかずきからぶどう液を飲むたびに、わたしが十字架にかかり、命をささげ、血を流したこと。そして、その血によってあなたがたの罪を神様はぜんぶゆるしてくださり、きよいものとしてくださっていることを思いおこしなさい。

パンを食べ、ぶどう液を飲むごとに、わたしたちはイエス様の命をいただいています。

そして、パンとぶどう液がないときにも、説教をとおして、命を与えてくださいます。

礼拝はイエス様がそなえてくださった 食卓なのです。

この食卓に、洗礼を受けていないみなさんもイエス様が招かれました。

イエス様はヨハネによる福音書10章16節でこのように語られました。

**わたしは羊のために命を捨てる。わたしにはこの囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声をききわける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。**

あなたにもきこえるはず。イエス様の声が。イエス様はみなさんにも 香のよい油をそそぎ、洗礼をさずけ、神の子としてくださいます。

なぜなら、神様はあなたを愛しておられるからです。あなたもわたしも大切な羊だ。わたしがあなたを守る。死からも罪からも。死をこえて、わたしがあなたを導く。

この愛を受け入れてほしい。 そう願っておられます。

**6節 命のあるかぎり、恵みと慈しみはいつもわたしを追う。主の家にわたしは帰り、生涯、そこにとどまるであろう。**

神様の恵み、深い愛といつくしみは どんなにわたしたちが逃げようと思っても追いかけてきます。

どうぞこの愛を受け入れてくださいますように。神様がこの神の家にみなさんを招かれました。神様が皆さんをとらえてくださいますように。